■字体表制定といふ暴挙

字体表の判定も暴挙です。「これこれの字はこの字体が基準である」などと誰だって言へるものではありません。まして、今まで存在しない漢字、それも漢字の構成原理を全く無視した漢字を勝手に作り、以後はこの字体を使へとは、秦の始皇帝にも劣らない暴挙と言はざるを得ません。

例へば、“突”や“戻”の“犬”を“大”に変へて“突”“戻”としてゐます。これらの字は“犬”といふ字を使ふ所にこの字の意味があるのですから、これを“大”にしたのでは、その字の本義が成り立ちません。突は「犬が穴からいきなり跳び出す」ことを表し、戻は「犬が家(戸)にもどる」ことを表したものですから、どうしても“大”では困ります。(戻は中国では「本性にそむく」意味に使ひますが、それは犬は家の外に居るべきもので、それが家の中にゐるので“そむく”意味に使ひます。然し、日本では、どんなに遠く家を離れても必ず家に戻る犬の本性から“もどる”意味に使ってゐます)

また、“歴”や“暦”の“厤”を“麻”に変へてゐます。厤は、稲刈りが済むと、崖(厂)に稲(禾)を次々と並べて立て掛け、日乾しにする事を表したもので、「次々と並べる」といふ意味を表した字です。それで、歴は「名所などを次々と訪れて足を止める」ことを表し、暦は「日を次々と並べて記述した“こよみ”」を表しました。これを“麻”にしたのではその意味が全く成り立たなくなってしまひます。

かういふ省略は、書く時の便宜を図っての事だと思ひますが、逆に点画をふやしてゐる字体もありますので、必ずしもさうでも無いやうです。例へば、“歩く”は“步″ が正字で、“少”が“少”に変へられてゐます。この字は“”で、右足の裏の形を表した止と左足の裏の形を表した少とを組合せて“歩く”といふ意味を表したものです。左足の前に右足が出てゐるので“歩く”といふ意味が表現できるのであって、“止”と“少”とでは意味が出て来ません。

このやうに、漢字は一点一画であっても、それにはそれだけの意味が存在してゐるのですから、これを疎かにしてはいけないのです。この字体表にはその重荷性が全く蔑ろにされてゐます。このやうなひどい新字体を勝手に作り、「以後はこれに従へ」と命ずる国語審議会の態度は、正に時代錯誤と言ふほかはありません。

そもそも字体表の字体は標準を示すものですから、一点一画でもこれを大切にして、勝手に変へるべきものではありません。然し、私たちがこれを書く場合には一点一画に執はれる必要は無いと考へてゐます。判読できないやうな字は書いてはいけませんが、判読できるならば、

点画に少々足りない所があっても、反対に余分な点画があっても、目に角を立てることは愚かだと思ひます。

　私は“歴”の字を書く場合、普通は省略して“厂”といふやうに書きます。時には、“厂”だけで済ませることもあります“厂史”とあれば、きっと“歴史”だと判読してくれると思ってゐるからです。だから、人が“突”を“突”と書くことや“歩”を“歩”と書くことを尤(とが)める気持はありません。

　然し、字体表の字体は違ひます。それは、個々の漢字の標準を示すものですから、“突”は“穴”と“犬″ との合字ですから、「穴が大きい」といふ“突”ではいけません。字体表の字体は「漢字の構成の原理に則った、歴史のある字体」でなければいけないのです。